シンポジウム「はっする言葉」の企画に際して

大　野　　出

2004（平成16）年度の文学部の公開講座はシンポジウムの形成をとった。それには、いくつかの思惑があった。

これまでの公開講座には、ともすれば、講師が担当する分野の知識について、一般市民にも分かりやすいように平易に講義するという性格を持ってしまう傾向があった。たしかに、公開講座というものの在り方として、こうした要素も重要である。

しかし、公開講座の受講者側のレヴェルも年を追うごとに高まっているように思われる。それに応じて、講義内容も高いレヴェルのものが要求されると考えた。そこで、講師たちにも自らの研究の最先端のものを公開講座において開陳してもらうことにした。つまり、最新の研究成果を愛知県立大学の文学部の教員各位から市民にむけて発信しようという試みをしてみたかったのである。

それに伴って、一方的に講義をするという従来の形式から一歩踏み出して、受講者の方々にも講義内容に関する討議に参加していただこうと考えた。

そこで、今回の公開講座、つまりシンポジウムでは、各回、受講者ひとりひとりに質問用紙を配布し、その日の講義内容についての質問を寄せていただくことにした。その質問に応ずる形で講師たちが討論をするという形式をとったのである。質問は多く寄せられた。私が司会を担当した第１回目に関する限りでは、受講者の大半の方が質問用紙に質問を記入し、シンポジウムに参加してくださった。そして、こうした試みは受講者の大多数の方々から支持をしていただけたようである。そのことは、お寄せいただいた質問用紙の文面からも十二分に通わってきた。本誌に掲載されている論攷の中には、シンポジウムでの質問に刺激されて執筆された部分も少なからずあろうかと思う。

シンポジウム全体のコーディネーターをつとめてくださった吉川雅博氏はじめ発表者各位、他学部に所属されているにもかかわらず、第3回目の司会を担当してくださった金森康和氏には心から感謝申し上げるばかりである。そして、今回のシンポジウムに関する論攷を愛知県立大学文学部紀要に掲載することをお許しくださった文学部紀要委員会の委員各位の寛大なる御高配に心より御礼を申し上げなければならない。